エゾマツ

北海道ボランティア・レンジャー協議会
エゾマツ１４号
平成２年８月７日
発行責任者
河村　千束

夏によせて

会長　　河村　千束

六月の上旬、ハクウンボクの花開くの記事が新聞に報道されてから、数日後に藻岩山のハクウンボクが満開になった。気象台の予報によれば北海道の今年の六月、七月の気温は極めて高く、八月は例年より涼しいと言う。

只今のところ予報どうり、初夏の訪れも例年より早いようである。私のフィルドノートによれば藻岩山のハクウンボクの満開は昨年は六月二十一日であった。今年は六月十二日で、例年より十日近く満開が早く訪れたことになる。初夏、それは昔も今も札幌では、「札幌神社の夏祭りから」が常識になっているが、私の初夏は藻岩山のハクウンボクの満開の日と決めてからここ数年になる。

札幌の街にライラックが咲き、アカシアの花が咲き乱れ、真白いハクウンボクの花が咲く頃が、北の都の最も美しい時であり、人々は春から夏への衣替をする季節である。やがて甘い香りを漂わせ、真白い花をつけるハシドイの花が咲くと、札幌に本格的な夏が訪れる。この頃が、樹々の花を楽しみながら街の緑、森の緑の移り変わりを見て歩くのに最も相応しい季節である。そして見知らぬ人と友となり雑談をしながら、さわやかな汗を流し、自然の息吹を五感を通し、私の五体に流れ込むと、自然の恵みの深さと幸せを感ずる季節も初夏から夏である。その友との語らいの中から新しい発見をすることが度々ある。その発見の積み重ねこそ身近な自然を知る上で必要なことであると気づいたときに、又新しいファイトが湧いてくるのも不思議なものである。

ささやかな知識、貧しい表現力しか持ち合わせない私を、自然は何時も温かく優しく抱いてくれる。「自然を愛しましょう」と言う人間側からの言葉に対し「楽しく遊びましょう」と自然からの語りかけを強く感ずるのも夏である。最近自然に関して色々のことが報道されている。今年の西側先進国の「ヒュストンサミット」でも、地球環境問題が論議された。それはそれとして、いまは私達の周辺を改めて見直す時と私は思っている。この見直しこそ北海道の自然が求めているのではないだろうか。

ともあれ、この美しい北の国の自然を残すためにも、多くの人と共に歩き、語り、身近な自然の歴史とその流れを探り、それを子供達に伝えていくのが私達「ボランティア・レンジャー」に課せられた課題かもしれない。

そして自然と人との関わりを求めながら自然を保全する輪を拡げていくことが、自然への架橋となることと、私は思っている。

(1990.7.30)

定期総会のご案内

大友　健

私ども「北海道ボランティア・レンジャー協議会」は本年度の期間中計画事項を実施して参りました。
これらの実績は、会員皆様のご協力、ご理解のたまものと、心より厚くお礼申し上げます。
さて、皆様、レィンジャーの方々も、年々増え、会員の活動の要請も多方面より受けると言う、喜ばしい実態になって参りました。
すでに、ご案内申し上げておりますが、次のとおり、総会を開催致しますので、萬障繰り合わせ、ご出席のうえ、協議会のより発展と充実のため、ご意見を下さいますよう心よりお願い申しあげます。

1．日時　　平成２年８月２５日（土）　１７時～
　　２６日（日）　１３時。

2．場所　　定山渓温泉　　豊林荘（営林署）
　　（事務局長）

お詫びと訂正

前回11号に投稿いただいた、小山賢一郎さんの原稿を編集者が原稿の一部を間違ってワープロを打ってしまいました。ここに小山さんと、読者の皆様に心よりお詫び申し上げ、つつしんで訂正させていただきます。尚、小山さんより原文を再度いただきましたのでここに掲載させていただきます。　（山上）

「初冬のひとときー」
――「小さなクモとの不思議な出会い」――

小山　賢一郎

外が寒くなって、森木の冬団いも長くは続けられなくなった。
そういえば、俗にハエトリ(注1)と称するクモが家のなかで目につくようになった。
ふと眼をこらすと、体長2ミリほどの、足の長さまではミリはあろうか。それにしても小さなクモ。おかしな恰好だ！　それもそのはず、右足は後ろの1本を残して前の3本がない？　なぜか一瞬奇妙かな？と内心眼を疑った。でも、やっぱりそうだ。「お前はどうしたの？」無言の問いかけに、応えてはくれない。だが、この問いかけが聞こえたのか足を止めてじっとしている。

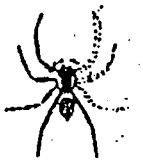
「いやー、どうしてこうなってしまったのか、僕にもとんとその原因がわからなくてさ。でも、それほど苦にはならない」「ほう！、僕の歩く先を追って見てくれ。こんなにスムーズに、結構早く歩けるだろう。わかってくれたかナ」「僕たちの仲間にも、どういうわけか時折こんな恰好のヤツをみかける」「でも、なんとか生きていける。たとえ、こんな恰好でも、おてんとう様の暖かさも季節の移り変わりも、ちゃんとわかる」「とにかく、僕に与えられた〝生〟を思う存分生きていこう」
「僕をじっと見つめてくれてありがとう！」、本当にしばしの時であった。そして、足早に、しかも確かな足どりで壁の隅に消えた。
私はこの短かい時間の、しかし、確かな小さな〝生〟の営みに限りないいとおしさを覚えた。そして、かつて　ファーブルが虫たちの小さな〝生〟の営みを見て、その虜になったように……。

いや、いまにして思えば、これからの人間の生存にかかわる大きな知恵を与えてくれたように、それが無言の訴えとなっていることに気付いた。
私に残されているこれからの人生に、また、ひとつの〝指針〟となった。すがすがしいひとときであった。

(注)1　ハエトリについては

ハエとりぐも　英語でジャンピング・スパイダーjumping-spiderまたはリーピング・スパイダーleaping-spiderといい、日本でもトビスケ、ハネグモなどの別名がある。広義にはクモ目ハエトリグモ科のものを総称し、狭義にはその1種ハエトリグモ Menemerus confusus をさす。ハエトリグモ科には350種もあり、日本産の属種もまだ調べつくされていない。かつて、種のみ知られる種類、雌だけしか採集されぬ種類などがいくつもあったが、それらのうち種類の性別にすぎないことの判明したのもある。狭義のハエトリグモは灰色で、雄7mm、雌10mmくらい。人家の戸べいや壁などをはい、ハエその他の小こん虫を捕える。昼光に大胆に獲物めがけて跳躍するが、はねるとき必ず腹部端から糸を引くから、かなり高い所からはねても空中を滑走するように見え、落ちることがない。網は張らない。40cmくらい離れた獲物もわかるといわれるが、8個ある単眼は3列に並び、それらも大小不同で、遠くから見つけたり近いものをはっきり見たりする。各単眼の機能に分業があるからであろう。（真島　啓雄）

(注)2　「世界大百科事典」24巻　317頁（平凡社　1977年版による）



ハエトリグモ科

平成２年度・野幌森林公園事務所の森林観察会

１　四季の森林観察会

◎　春の森林観察会　　平成２年５月１３日（日）９：30～14：30

◎　夏の森林観察会　　平成２年８月１２日（日）９：30～14：30

◎　秋の森林観察会　　平成２年１０月１４日（日）９：30～14：30

◎　冬の森林観察会　　平成３年３月１０日（日）９：45～14：00

［集合場所やコースなどは、２週間前までに決定します。］

２　特別行事（道保健環境部自然保護課と共催）

◎　野幌自然フォーラム　平成２年６月１０日（日）９：30～16：00
［観察会とフォーラム。集合場所や内容などは１ケ月前までに決定します。］

◎　こもれびイン野幌　平成２年９月９日（日）（時間未定）
［林間講座と野外観察。時間や内容などは１ケ月前までに決定します。］

３　月例観察会

［開拓記念館集合で、記念館周辺の自然を観察します。］

◎　４月の月例観察会　　平成２年４月１２日（木）10：00～12：00
◎　７月の月例観察会　　平成２年７月１２日（木）10：00～12：00
◎　１１月の月例観察会　平成２年１１月８日（木）10：00～12：00
◎　１２月の月例観察会　平成２年１２月１３日（木）10：00～12：00
◎　１月の月例観察会　　平成３年１月１０日（木）10：00～12：00
◎　２月の月例観察会　　平成３年２月１４日（木）10：00～12：00

森林観察会に関しては、北海道野幌森林公園事務所（公園管理部公園利用課）まで、お問い合わせください。

〒003 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2　開拓記念館内
Tel:011-898-0455（内線41番・42番）

野幌自然フォーラム行事に参加して

札幌　　大友　健

本年度の環境週間行事として、北海道、北海道大学環境科学研究科の主催で、新緑の野幌森林公園にて、午前中は自然観察を行い、午後は北海道開拓記念館講堂で、自然フォーラムが実施された。

私どもの、「北海道ボランティア・レンジャー協議会」は協力と言う立場で、会員１５名の参加が当日あり、特に自然観察会で大活躍をしたのである。

一般参加者も、ファミリーと、子供会が主体で１５０名程度が、班別に午前中の時間帯を、瑞穂の池コースで自然観察を行い、昼食後観察会は、現地解散で終了した。

時期的に、そして前日の強風のためか、下見会のときより、木の花、山の花は少なく、期待していた「ヤマシャクヤク」の花も見当たらず、解説者として残念に思ったのは、私のみだろうか。エゾハルゼミの大合唱で、通称セミしぐれのなかを歩いたのである。

林内の道端に、咲き終え、咲き始めようとする、野の花、山の花を参加者は、記憶にとどめようと、配布のテキストを見開きながら、樹林の葉の型、そして樹肌の特徴など、いわゆる五感で理解しようと、子供会の少年も、興味をもちながらの観察会であった。

午後は、「すばらしい野幌森林公園の自然をみなおそう」のテーマで北大小野有五先生の、一般参加者にも理解ができて、この森林環境の果たす役割と、素晴らしい森林環境を、２１世紀の人々に引き継ぎをしなければならないと言う、自身に改めていい聞かせるものであった。

続いて「野幌で出会う動物たち」と題し、野幌森林公園を守る会々長である、柳沢信雄先生より、野幌森林公園に、以前より生息し、人々が見かけた動物の、個体数の減少している実態など詳しく話された。

地域と言おうか、環境の変化と言うべきか、私達の配慮で自然の保全に微力でも、努力を惜しんではいけなと思うのである。

最後に、専修大学北海道短大助教授の、石川幸雄先生より、「野幌の森のおもしろさ」と題してのお話しであった。

森林を構成する樹々、そして樹郡が構成する森林環境は、いろいろな生物の営みをうながし、自然の世界における、遷移のサイクルがあり、これらにより保たれる、自然環境が、人間生活に大きな役割を果たしている点を考えさせられた。

３人の先生方のお話は、環境週間に関心を持つ聴衆にそれぞれ感銘を与え、２～３の人々より環境保護対策、森林公園の管理についての意見などが出され、森林公園管理担当者の、油津部長は行政面の配慮と、利用する人々の森林に親しむ心は、今後も野幌の森を、豊かな自然環境をつくり上げるであろうと、力強く語られ、予定どおり締めくくられた。

ボランティア・レンジャー実践セミナーから

4回生　佐々木　幸夫

昨年7月、ボランティア・レンジャー育成研修会を受講した1年生が、今度、実践セミナーに参加する機会を得た。

7月7日（土）と、8日（日）の1泊2日、札幌市南区にある国営滝野すずらん丘陵公園青少年山の家。初めて訪れた施設は立派なもので、国ならではの感を強く感じた。

参加者24名。支庁別にみると、石狩15人、空知3人、十勝2人、網走2人、留萌1人、渡島1人となっている。

1日目の研修「自然観察会における企画・立案について」は、野生生物情報センター代表委員の小川巌さんが講師でその内容は、私達ボランティア・レンジャーにとつて基本的な事がらであり、すぐ活用できるものであるから大変有意義なものとして受けとめられた。特に私にとっては、経験に乏しいので単に書物をもって理解するのと違い、実際に自然観察解説員（ご本人はフィルドフオーレスト・デレクターが適当といわれているが）として活躍されている人の話であり、その実習であるから新鮮であり、また即戦力となることから自然とこちらも力が入る。

要約すると、初めに心がけなければならないことは種名を覚えることではなく、相手方の情報（人員、年齢層、関心度等）とフィールドについての的確な情報の把握であり、参加者に自然のなかでの遊び（ゲーム）を通じて、日頃み過ごされがちな自然に興味をもってもらうきっかけを作ることが、最大の狙いだといっている。

また、自然観察解説員は・学校の先生タイプ・バスガイドタイプ・ホステスタイプの3つに分類をすると、ホステスタイプになるという話も納得がいく。

このタイプは、常に置かれている状況を理解し、お客様を十分に楽しませるタイプであるとなかなか比喩に満み、含蓄ある言葉で巧みな譬えで関心した。こんな喋りも自然観察解説員として必要なんだとも思う。

講義の内容も、具体的に例をあげそれに対応するのにどうしたらよいか。講師の方から問いかけがあるなど、一方的なものに終わなかったのも印象に残る。

さて都合でセミナーに参加出来なかった皆さん。次のケース④の場合、貴方が自然観察解説員として対応するとしたら、どうやりますか。

	ケース①	ケース②	ケース③	ケース④
時期	6月下旬	9月下旬	2月下旬	5月中下旬
場所	定山渓	野幌森林公園	西岡水源地	?
時間	午前中2時間	半日	2時間	3時間
対象	小学校ＰＴＡ 30人	小学校2年生 30人	一般募集30人	200人

目的	森の楽しさ	森についてのハイキング	冬の生きもの	森を楽しむ
受入側の条件	自然解説員 2人	自然解説員 2人	自然解説員 4人	自然解説員 3人

対応策

1. 条件によって、その対応の仕方を変える。
2. 小道具を使う。
3. クイズ方式など、参加した人達が考えるような設問。
4. ゲームを通じ、自然の面白さが摑めることを考える。
5. 相手の程度、レベルにあわせた橋渡しが必要。
6. 参加者の一人ひとりが考えるのではなく、グループで考えるような仕組みにする。

早速、野外実習ではグループを編成し、ある区間を観察したその結果をテーマにしぼってグループごとに解説の発表をした。

私は題1班でトップに解説することになり、一生懸命したつもりだが、大前ではあがり気味で、思っていることを十分に話せなかった。同じ区間を同じ人間が見ているのだが、同じ解説になるとは限らない。それぞれにその着眼点、表現の方法に差異があり、これも学ぶ点が多かった。

そのほか、・標識を付ける方法　・思い出しクイズ　・森のカルタ遊び・野鳥の囀り　・木の葉の虫こぶなど見る・さわる・かぐ・きくと身体を使って貴重な体験をした。

いずれにしても、自然観察会における企画・立案は、下見を十分にとり舞台監督の様な気持ちで、その時間帯の主役、盛り上がりの場面、仕上がりなどを考えたシナリオを作ることが強調されていた。

夕食を済ませ、5人の方から体験発表があった。この時間帯は七夕にかけて天体観測を予定していたのであるが曇天となり、その代替えとして事務局がオリエンテーションの際の自己紹介のなかから、関心のある内容の方を選んでお願いしたものである。

終わった後就寝にはまだ早いように思われた。折角遠方から参加された人達もおり、もっと共通的な話題で自主的な話し合いをする時間をもってよいのではないかと反省している。

狭い空間に多人数、しかも寝袋に入っての初体験はなかなか寝つかれなかった。

2日目、朝食前に展望台へ行き、周囲を眺望する予定だったが濃霧で中止となる。

だんだん霧も晴れてきたので、散策をしたがここで樹雨（きさめ）を体験する。雨滴の落下する音が以外と大きいのに驚いた。

研修内容は「樹木と土壌」と題されたが、北海道立林業試験場主任研究員の斉藤満さんが講師になって、ヤチダモの成育と土壌条件、土壌全般についての知識、野外実習では、植生と土壌調査を中心に、遊歩道で露頭の土層や今回このセミナーで特別に特別の許可を得て試掘した調査試孔の土壌断面の見方など、きめ細かな資料、解説に感謝の念しきりであった。

2回にわたるセミナーを終えて、小川厳氏の結びとして「自然観察会を通じて、参加者の皆さんの心の中に自然を愛する気持ちが育てられれば、

重責

それこそ、本当の北海道の財産になると信じている」と言った言葉が胸に焼きつけられ、あらためてボランティア・レンジャーの貴重さを認識した。

今後もいろいろな機会を通じてボランティア・レンジャーとしての質をたかめたいと思っているが、当局ももっと実践セミナーの年間回数を多くしたり、日常のボランティア・レンジャーの性格からセミナー参加費用など経済的負担をさせないような配慮が必要ではないだろうか。

（1990. 7. 25 記）

＊＊＊＊＊＊＊＊　原稿募集について　＊＊＊＊＊＊＊＊

原稿を募集しています。

お気軽に投稿して下さい。

自然に関する内容であればどのようなものでも結構です。

送り先

〒 062
札幌市豊平区月寒西３条８丁目
１番１－３１２

山上 光一

特にまだ１度も投稿なさっていない方はこの機会にお気軽に是非お寄せ下さい。お待ちしていますす。

「観察の手引」を作って

住吉　光子

ボランティア・レンジャー協議会が、野幌森林公園主催森林観察会のお手伝いをさせていただくようになってほぼ4年になる。

私の場合はまだ2年であり、お手伝いと言うより観察会のノウハウを指導していただくようになってからと言った方が本当である。事実歴代の担当者である事務所の畠山さん、野村さんに教わったことは数多く、感謝の気持ちでいっぱいである。

家庭の事情で当初はまばらにしか参加できなかったが、最近は殆ど都合をつけて出られるようになった。特に観察の手引を作成するようになってからは、抜けられなくなってきたという感が強い。

野幌森林公園は我が家から車で5分とはかからない所にあるので、手引を作成するための下見も、割合心易く出かけることができる。難を言えば一人出歩くことにあまり慣れていない私にとって、雪道を壺足でおそるおそ歩いたりた、樹木が茂ってほの暗い林道を歩く時の心細さであろうか。そんな時は、無理やり会長を電話で引っぱり出したり、いやがる夫を運動になるからと言って一緒に歩いたりしてもらったりしている。

春から夏にかけての森林の変化は早く1週間と同じではない。手引の作成が、観察会当日の為に万全であることは非常に難しい。例えば、つい先頃の野幌フォーラムでも、次の様なことが上げられる。

この時期の野幌森林公園は、ラン科の花が見ごろである。下見は1週間まえ、会長、副会長、八戸さん、住吉の4人で行った。昨年の記録では同じコースでコケイランを1・2本確認しているだけである。この日はラン科の花にこだわりながら、コケイランが数本、サイハイランが1本見つけることができた。2度目の下見は当日の4日前、サイハイランを3本、コケイランを1本確認、ところが6月10日当日はサイハイランが数本、コケイランはなし、トケンランがなんと群生で数10本数か所で観察できたのである。

勿論ラン科の花の為に観察会があるのではないが、毎月この会を楽しみにして集まる方々と、1年の中で、ほんのこの一瞬にしか開かない花を共に愛でたいと思うのでこだわるのである。これは、野鳥の会が初認と終認と称して、渡り鳥を愛でるのと同じ心境である。

手引を作ることにより勉強させられることが多い。何よりも参加する方が喜んで下さることが励みになっている。気がついた事を書き込んでいくことで、そのまま記録になっている。いつまで続けられるか、心許ない作業であるが、もう少しの間続けてみようかと思っている今日この頃である。

編集後記

「まちがってはいけない。ここにある自然は、私達だけのものではけしてない。それは祖先から一時的に借りたものである。この大切な自然を永く我々は子孫に伝える義務がある」 ―― この様な趣旨のフレーズをこの頃報道機関が報じるようになった。
投稿された文章を打ちながらこのフレーズの意味の持つ重さをあらためて感じとることが出来きました。ありがとうございました。

―― 山上 ――